

医療系大学及び大学院に対する高校生の意識に関する研究

平野(小原), 裕子
九州大学医学部保健学科看護学専攻

東田, 善治
九州大学医学部保健学科放射線技術科学専攻

梅村, 創
九州大学医学部保健学科検査技術科学専攻

豊福, 不可依
九州大学医学部保健学科放射線技術科学専攻

他

<https://doi.org/10.15017/36>

出版情報：九州大学医学部保健学科紀要. 1, pp.59-70, 2003-03. 九州大学医学部保健学科
バージョン：
権利関係：



医療系大学及び大学院に対する高校生の意識に関する研究

平野 (小原) 裕子*、東田善治**、梅村創***、豊福不可依**、
小島夫美子***、田宮貞史***、長家智子*、赤坂勉**

Study on High School Students' Recognition of Health Science Colleges and Graduate Schools

Yuko Ohara-HIRANO*, Yoshiharu HIGASHIDA**, Tsukuru UMEMURA***,
Fukai TOYOFUKU**, Fumiko KOJIMA***, Sadafumi TAMURA***,
Tomoko NAGAIE*, Tsutomu AKASAKA**

- * 九州大学医学部保健学科看護学専攻 (Department of Nursing, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kyushu University.)
- ** 九州大学医学部保健学科放射線技術科学専攻 (Department of Radiological Sciences, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kyushu University.)
- *** 九州大学医学部保健学科検査技術科学専攻 (Department of Medical Technology, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kyushu University.)

Summary

School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kyushu University, which would soon enroll its first freshmen in early 2003, conducted a questionnaire survey to participants of open campus in August, 2002. The purpose of the survey was to clarify how high school students recognize Health Science Colleges and Graduate Schools.

A total of 376 respondents (all but one were high school students) answered the questionnaire. 92.5 percent of respondents were women, and 80.7 percent were sophomores. 91.0 percent of respondents answered that it was important or somehow important for them to enter four-year colleges (referred to as 'Importance to enter four-year colleges'). While only 48.7 percent of respondents answered that they were interested in studying at graduate schools (referred to as 'Interest in graduate schools'). No significant correlation were observed between type of occupation they wish to take up in the future (referred to as 'future occupation') and 'Importance to enter four-year colleges' score. On the other hand, future occupations namely researcher and professor marked significantly higher 'Interest in graduate schools' scores, while co-medical workers marked significantly lower scores.

The multiple regression analysis indicated that 'Importance to enter four-year colleges' was the biggest indicator to 'Interest in graduate schools' regardless the type of regression model.

Throughout the study, it can be noticed that the background of high school students' recognition of four-year college and graduate schools was different. However, it seems that the more they feel it important to enter four-year college, the more they are likely to be interested in studying at graduate schools.

Key Words: College education, high school students, health sciences, graduate schools.

I はじめに

わが国における大学の大衆化¹⁾の傾向が指摘されて久しい。大学が乱立し、誰でも進学できるようになった。その結果、学生の質の低下が指摘され始めている。一方、少子化の兆しが見え始め、大学は教員養成学部を始めとして、リストラの対象となりつつある。そのために、現存する大学は生き残りをかけてその特徴を打ち出し、学生を獲得しようとしている。今日、「大学院の弾力化」²⁾を目的とした大学院設置基準改正に基づき、全国的に大学に大学院を付設しようという動きが活発化しているのも、大学の生き残り策の一つであると言えよう。

大学がリストラの対象となりうる時代において、昨今の医療系福祉系の大学の増設は、最後の大学設立ラッシュと言われている。全国的に受験者数が少なくなり、競争率が低くなっている今日、新設大学は威信をかけて、できるだけ質の高い学生を獲得することを目標としている。また、国立大学にあっては、平成16年度からの独立法人化を控えており、自分たちの大学の特徴を打ち出すことは、いよいよ急務となっていることが指摘されよう。

大学教育、大学院教育をめぐるこのような社会的な動きの中で、社会が大学及び大学院に対して期待する役割も変化し、またそのことが、高校生の大学及び大学院への進学の動機付けにも影響を与えうることが考えられる。そこで本研究では、これから四年制大学を設立し大学院設置を準備中である大学に対し、高校生が何を求めているのかを明らかにすることを目的とした。高校生は、生き残りをかける大学にとって重要なカスタマーであり、彼らの声を分析することを通して、より社会的ニーズの高く質の高い大学教育、大学院教育を提供することができると考えられるからである。

II 本研究の対象と方法

本研究の対象は、2002年8月に行われた、九州大学医学部保健学科説明会に出席した福岡県内外出身の計376名である。調査票は、説明会当日、

出席者全員に配布され、説明会後に回収された。なお、本研究では、有効回収率は94.9%であった。

調査項目は、属性に関する項目として、学年・性別及び受験を希望している専攻（以下「希望専攻」）、説明会を通しての大学への関心に関する項目（以下「大学への関心」）、四年制へのこだわりの度合い（以下「四年制へのこだわり度」）及びその理由、大学院への関心の度合い（以下「大学院への関心度」）及びその理由、将来就くことを希望している職種（以下「希望職種」）及び説明会及びアンケートに関する自由記述である。

統計的分析には、PC版統計パッケージSPSS10.0Jを使用し、主に単純集計、 χ^2 検定、T検定、一元配置分散分析、因子分析、重回帰分析を行った。なお、因子分析の過程では、主因子法で因子を抽出し、バリマックス回転を行った。そして固有値1.5以上という基準で因子を抽出した。また、項目間の内部整合性を調べるため、Cronbachの α 係数を算出した。

III 結果

1. 本研究の対象者の特徴

本研究の対象者の属性は表1のとおりであった。学年別には2年生が80.7%を占めており、女性は全体の92.5%であった。また、希望専攻は、看護学専攻251人（67.3%）、検査技術科学専攻80人（21.4%）、放射線技術科学専攻42人（11.3%）の順で多かった。

本研究の対象者が将来大学や大学院を修了した後に就くことを希望している職種（複数回答）としては、「医療専門職」324人（91.3%）、「研究職」43人（12.1%）、「教育職」42（11.8%）で、圧倒的に「医療専門職」を希望している者が多かった。希望専攻毎に属性を比較したところ、学年別には有意な差は見られなかったものの、女性は看護学専攻及び検査技術科学専攻に多く、男性は放射線技術科学専攻に多い傾向が明らかになった（ $p<0.001$ ）。

また、将来就くことを希望している職種毎に属性を比較したところ、「研究職」を希望している

者の割合は2年生（9.1%）よりも3年生（25.4%）で有意に高く（ $p<0.001$ ）、希望専攻別には、検査技術科学専攻（29.7%）、放射線技術科学専攻（15.0%）、看護学専攻（6.3%）の順で高かった（ $p<0.001$ ）。

表1. 対象者の属性（N=376）

	n	%
性別		
女性	346	(92.5)
男性	28	(7.5)
学年		
2年生	302	(80.7)
3年生	69	(18.4)
その他（うち1年生2名、社会人1名）	3	(0.8)
希望専攻		
看護学専攻	251	(67.3)
放射線技術科学専攻	42	(11.3)
検査技術科学専攻	80	(21.4)
希望職種（複数回答）		
「医療専門職」	324	(91.3)
「研究職」	43	(12.1)
「教育職」	42	(11.8)

2. 高校生が持つ「大学への関心」及び関連要因

説明会に参加した高校生の、「大学への関心」について、17項目に分けて聞いたところ、もっと知りたい項目としては、「大学を卒業後就くことのできる職種の仕事の内容についてもっと知りたい」（95.5%）、「大学で履修する実習科目の内容についてもっと知りたい」（94.7%）、「大学を卒業後取得することのできる資格についてもっと知りたい」（93.3%）「大学で履修する専門科目についてもっと知りたい」（91.7%）の順で多いことが明らかになった（図1）。

次に、高校生の「大学への関心」の構造を明らかにするために、全17項目を投入して因子分析を行った。その結果、3因子が抽出された（表2）。第一因子は、大学における講義や実習などのカリキュラムの内容に関するもので、これを「大学のカリキュラムへの関心」因子と命名した。第二因子は、入試や卒業後の就職に関わる内容に関するもので、これを「自分の進路への関心」因子と命

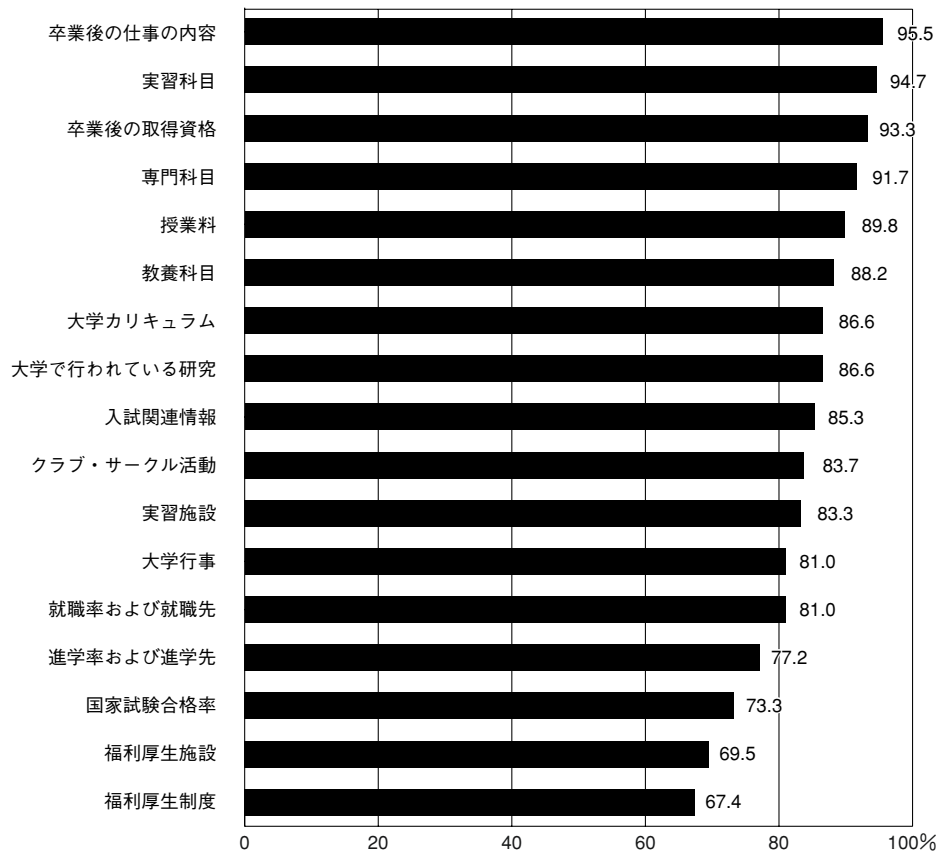


図1. 大学への関心

表 2. 「大学への関心」の内部構造分析 (主因子法)

	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
大学カリキュラム	.576	.245	.220	.440
教養科目	.763	.103	.150	.616
専門科目	.848	.151	.094	.750
実習科目	.699	.218	.116	.550
大学で行われている研究	.450	.175	.198	.272
実習施設	.378	.214	.369	.325
福利厚生施設	.147	.044	.596	.379
福利厚生制度	.105	.155	.531	.316
授業料	.155	.123	.655	.469
大学行事	.113	.173	.579	.378
クラブ・サークル活動	.097	.111	.483	.255
入試関連情報	.308	.353	.252	.283
卒業後の取得資格	.301	.471	.166	.341
卒業後の仕事の内容	.350	.507	.199	.419
国家試験合格率	.140	.781	.231	.684
就職率・就職先	.119	.870	.149	.792
進学率・進学先	.194	.730	.089	.579
因子寄与	2.92	2.80	2.11	7.83
因子寄与率	17.2	16.4	12.4	46.0

名した。第三因子は、大学における福利厚生施設や制度、行事の内容に関するもので、これを「大学生活への関心」因子と命名した。なお、各因子に類型される項目間の α 係数は、0.72~0.84であった。

次に、3 因子毎に属性との関連を調べたところ、「大学のカリキュラムへの関心」は2年生よりも3年生において平均得点が有意に高いことが明らかになった ($p<0.01$) 他は、特に有意な関連は見られなかった。

3. 「四年制へのこだわり度」及び関連要因

「四年制へのこだわり度」については、自分にとって四年制に移行することは「重要」「どちらかといえば重要」と回答した者は91.0%と、9割を越していた (図 2)。なお、「四年制へのこだわり度」と性別、学年、希望専攻、希望職種との間には有意な関連は見られなかった。

「四年制へのこだわり度」と「大学への関心」を構成する各因子との関連については、「四年制へのこだわり度」と「大学のカリキュラムへの関心」($r=.200$, $p<0.01$)、「自分の進路への関心」($r=.162$, $p<0.01$) との間に正の有意な相関が見られたが、「大学生活への関心」との間には有意な相関は見られなかった。また、「大学のカリキュラムへの関心」($p<0.05$) 及び「自分の進路への関心」($p<0.01$) に関連する因子の平均得点は、「四年制へのこだわり度」について「四年制大学に進学することは重要・どちらかといえば重要」と回答した者が、「どちらかといえば重要ではない・重要ではない」と回答した者よりも有意に高くなっていた。

「四年制へのこだわり度」の理由を複数回答で尋ねたところ、「自分の関心のある勉強を深められると思うから」(70.4%)、「就職により有利になると思うから」(50.4%)、「取得資格がより増

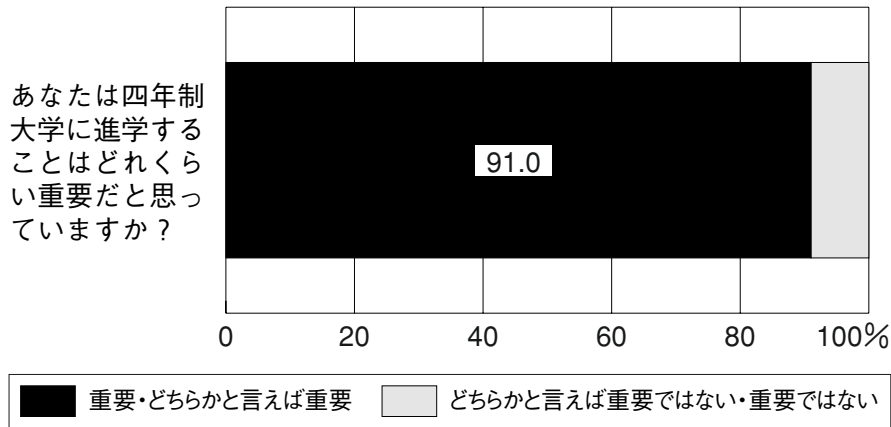


図 2. 四年制へのこだわり度 (n=365)

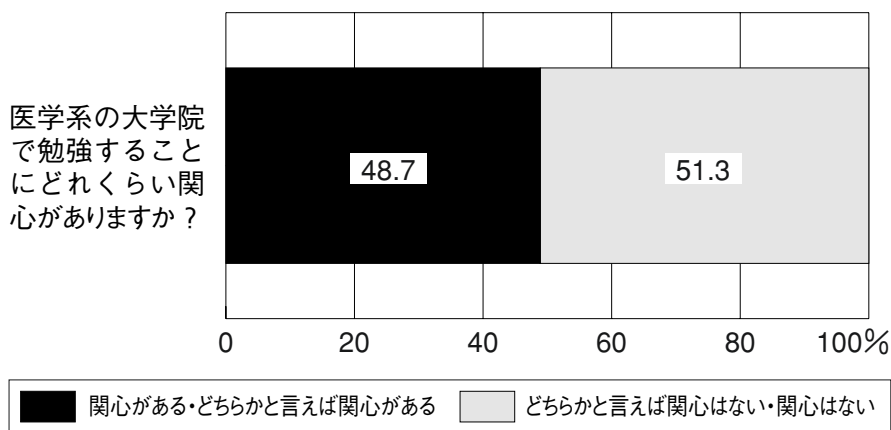


図 3. 大学院への関心度 (n=318)

えると思うから」(42.2%)、「学生生活をよりゆったりと過ごせると思うから」(22.0%)、「大学院にそのまま進めるから」(6.5%)「その他」(1.8%)の順で多かった。また、「四年制へのこだわり度」の理由を属性毎に比較したところ、学年別には「自分の関心のある勉強を深められると思うから」($p<0.05$)及び「大学院にそのまま進めるから」($p<0.05$)と回答した者の割合は2年生より3年生の方が有意に高かった。また将来就くことを「希望職種」別には、「研究職」を希望している者の割合は、そうでない者に比べて「大学院にそのまま進めるから」と回答した者の割合が多く($p<0.05$)、「教育職」を希望している者であっては、そうでない者に比べ「取得資格がより増えると思うから」($p<0.05$)「大学院にそのまま進めるから」($p<0.01$)と回答した者の割合が高かった。一方「医療専門職」を希望している者で

は、そうでない者に比べ「取得資格がより増えると思うから」($p<0.01$)及び「大学院にそのまま進めるから」($p<0.01$)と回答した者の割合が低かった。

4. 「大学院への関心度」及び関連要因

次に、「大学院への関心度」を明らかにするため、将来医療系大学の大学院で勉強することにどれくらい関心があるかを尋ねたところ、「関心がある」「どちらかといえば関心がある」と回答した者は48.7%であった(図3)。なお、「大学院への関心度」の設問に対して無回答だった者は55人(全体の14.6%)と、「四年制へのこだわり度」に対して無回答だった者1人(全体の0.3%)に比べて非常に多く、ことに2年生(45人)は無回答であった者のうち86.5%を占めていることが明らかになった。

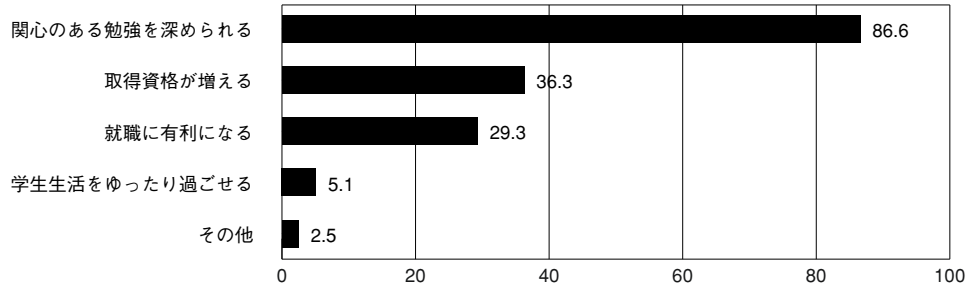


図4. 大学院に関心を持つ理由（複数回答）

「大学院への関心度」と属性との関連を明らかにしたところ、性別及び希望専攻別には有意な差は見られなかったが、学年別には有意な差が見られ、2年生（45.5%）よりも3年生（60.7%）において、「大学院への関心度」が高いことが明らかになった ($p < 0.05$)。また、将来大学や大学院を修了した後に就くことを希望している職種については、「研究職」 ($p < 0.001$) 「教育職」 ($p < 0.05$) においては、それぞれの職種に就くことを希望している者で「大学院への関心度」について「関心がある・どちらかといえば関心がある」と回答している者の割合が高く、「研究職」においては74.4%、また「教育職」においては63.9%が、大学院に対して「関心がある・どちらかといえば関心がある」と回答している。一方、「医療専門職」に就くことを希望している者は「大学院への関心度」について「関心がある・どちらかといえば関心がある」と回答している者の割合が有意に低く ($p < 0.05$)、46.7%であった。

「大学院への関心度」と「大学への関心」を構成する各因子との関連については、「大学のカリキュラム」に関連する因子の平均得点は、「大学院への関心度」が「関心がある・どちらかといえば関心がある」と回答した者で有意に高くなっていった ($p < 0.05$)。また、「大学院への関心度」の度合いと「大学のカリキュラムへの関心」 ($r = .142$, $p < 0.05$) 及び「自分の進路への関心」 ($r = .125$, $p < 0.05$) とは有意な正の相関が見られたが、「大学生活への関心」との間には有意な相関は見られなかった。

また、大学院への関心を持つ理由（複数回答）として最も多かったのは、「自分の関心のある勉

強を寄り深められると思うから」（86.6%）であり、続いて「取得資格がより増えると思うから」（36.3%）、「就職により有利になると思うから」（29.3%）、「学生生活をよりゆったりと過ごせると思うから」（5.1%）の順で多かった（図4）。

大学院への関心の理由を属性毎に比較したところ、男性に比べ女性において、「関心のある勉強を深められる」と回答した者の割合が高いことが明らかになった ($p < 0.05$)。

なお、「大学院への関心度」と「四年制へのこだわり度」との間には、弱い相関 ($r = .219$, $p < 0.01$) が見られたが、 χ^2 検定の結果、「大学院への関心度」の有無と「四年制へのこだわり度」の有無との間には有意な差は見られなかった。

5. 「大学院への関心度」に影響する要因

次に、「大学院への関心度」に影響する要因の強さを比較するため、重回帰分析を行った。独立変数は、属性及び「四年制へのこだわり度」、希望職種、そして、「大学院への関心度」と有意な相関の見られた「大学のカリキュラムへの関心」及び「自分の進路への関心」である。なお、「大学のカリキュラムへの関心」と「自分の進路への関心」との間には強い相関 ($r = .527$) が見られたため、「大学のカリキュラムへの関心」を投入した回帰式をモデル1、「自分の進路への関心」を投入した回帰式をモデル2として別個に投入することにした。また、希望職種（「研究職を希望しているかどうか」「教育職を希望しているかどうか」「医療専門職を希望しているかどうか」）ごとにモデル1及び2の構造を比較した。その結果、いずれの回帰式においても、最も強く影響してい

たのは「四年制へのこだわり度」であった。なお、「研究職」及び「教育職」を希望している者は「大学院への関心度」に正の関連が見られたが、「医療専門職」を希望している者は負の関連をみた（表3）。

Ⅳ 考察

1. 「大学院への関心度」と、「四年制へのこだわり度」の違い

(1) 高校生にとって四年制大学とは何か？

本研究では、「四年制へのこだわり度」に対する回答率が高かったのに対し、「大学院への

関心度」の回答率は比較的 low、その傾向はことに2年生において強かった。つまり、2年生の時点では大学に入学することに関心はあっても、大学院進学までには考えが及ばないのに対し、3年生になると、大学院までも射程に入れた大学選択が行われている可能性が考えられる。このことは、学年が高くなるにつれ、「大学院への関心度」も高くなる傾向が見られたという結果とも一致する。

また、「希望職種」毎に、「四年制へのこだわり度」及び「大学院への関心度」の度合いの分布を比較したところ、「希望職種」と「四年制

表3. 「大学院への関心度」を規定する要因

モデル1

	研究職 β	教育職 β	医療専門職 β
学年（2年生=1・3年生=2）	.145 *	.159 **	.152 **
性別（女性=1、男性=2）	.012	.025	.016
放射線技術科学専攻	.055	.028	.006
検査技術科学専攻	-.001	.113 *	.088
看護学専攻	reference	reference	reference
「大学のカリキュラムへの関心」	.104	.104	.112 *
四年制へのこだわり度	.157 **	.165 **	.176 **
希望職種	.130 *	.148 **	-.169 **
R	.337 ***	.346 ***	.356 ***
R ²	.114	.120	.127

モデル2

	研究職 β	教育職 β	医療専門職 β
学年（2年生=1・3年生=2）	.152 **	.169 **	.162 **
性別（女性=1、男性=2）	.012	.024	.016
放射線技術科学専攻	.043	.027	.003
検査技術科学専攻	-.005	.104	.079
看護学専攻	reference	reference	reference
「自分の進路への関心」	.101	.085	.103
四年制へのこだわり度	.164 **	.175 **	.185 **
希望職種	.141 *	.145 *	-.172 **
R	.340 ***	.344 ***	.357 ***
R ²	.116	.118	.127

へのこだわり度」との間には有意な関連は見られなかったが、「大学院への関心度」については、全ての職種において、有意な関連が見られた。つまり、四年制大学への関心は将来自分が就こうとする職種の別に関係なく一様に高いが、大学院に対しては、将来自分が就こうとする職種により、関心の度合いが変わってくると考えられるのである。これは、四年制大学と大学院の機能が異なること、またそれぞれの教育機関の機能の違いに対する高校生の期待の違いを表していると言えよう。

高校生にとって、四年制大学は自分の将来の職業に関わる資格をとるところであるという認識が高いようである。このことは、「大学のカリキュラムへの関心」及び「自分の進路への関心」に関連する因子の平均得点が、四年制へのこだわりが強い者において有意に高かったことによっても裏付けられる。平成不況の昨今、大学新卒者の就職率は90%を下回り、これまでにない就職難であると言われている³⁾。従って、最近の高校生や保護者は、就職状況で大学を選ぶ傾向が多くなってきた⁴⁾。本調査でも、四年制にこだわる理由として、「就職により有利になると思うから」(50.4%)「取得資格がより増えると思うから」(42.2%)をあげた者が半数近くを占めたことからそれは明らかである。新卒者の中でも、ことに女性の就職は、男性よりもはるかに困難であるとされ、そのために、就職に有利な資格を取得できる学部に対する女子高校生の期待は高いと思われる。女性は、経済的安定性を獲得できるという理由によって看護職を選択する傾向があるというアメリカでの調査がある⁵⁾が、看護職に限らず、資格取得ができる学科は女性に人気がある。本調査の対象者一すなわち、医療人育成課程としての医学部保健学科に進学を希望する者一の9割以上が女性であることから、それは裏付けられると言えよう。

(2) 大学院への関心に影響する要因

それでは、高校生の持つ大学院への関心に影

響する因子は何であろうか。

まず、「希望職種」と「大学院への関心度」については、全ての職種において、有意な関連が見られた。しかし、その関連の仕方には、「希望職種」別にパターンの違いが現れた。すなわち、「研究職」および「教育職」を希望する者で「大学院への関心度」が有意に高い傾向にある一方、「医療専門職」を希望する者では有意に低かったのである。このことから、「大学院への関心度」に影響を与える因子の構造は、「希望職種」を「研究職」あるいは「教育職」とした者については、共通しているが、「医療専門職」とした者については、「大学院への関心度」に影響を与える因子の構造が異なっていることが考えられた。

高校在学中の時点で、「研究職」を目指す決意のある者は、大学院への関心があって当然とも言える。また「教育職」希望者が就くことができる職種⁽¹⁾については、ケース1のように大学教官などを想定した場合、研究職と共通した仕事の内容が多いことに気がつく。従って、「研究職」を希望する者及び「教育職」を希望する者に対しては、共通したタイプの大学院教育が期待されていると考えられる。

一方、「医療専門職」になるには、とにかく資格を取得できる大学を卒業すればよい、と高校生が考えるのは自然なことであるから、大学院に対しての関心は、「研究職」「教育職」希望者ほど高くないかもしれない。しかし、「医療専門職」を希望する者であっても、その46.7%が「大学院への関心度」について「関心がある・どちらかと言えば関心がある」と回答したことに反映されているように、およそ半数の者が大学院に関心を寄せていることは注目に値する。医療専門職の専門化高度化に伴って、従来の「研究職」「教育職」タイプの学生を対象とした、研究開発者育成機関としての大学院のみならず、「医療専門職」をも対象にした大学院教育を提供することは、社会的ニーズがあると考えて良い。

そもそも、「大学院への関心度」に最も強く

影響するのは、「希望職種」のいかんに関わらず「四年制へのこだわり度」であった。四年制大学にこだわることは、学歴にこだわることである。大学院に進学するための最も一般的なルート⁽²⁾は、四年制大学を卒業し学士号を得ることであるから当然ではある。しかし、このことは見方をかえれば、四年制大学に移行した大学に対し、次は大学院を設置することを期待する高校生が少なくないことを意味していると言える。このような高校生の大学院設置を望む声は、自由回答にも現れている（ケース1）。看護大学の急増など、医療人教育の高学歴化が進む今日、高校生の大学院志向にも拍車がかかりつつあるといえる。

2. 医療系大学院に望まれること

(1) 「大学院」への期待の移り変わり

全国的に大学院重点化の動きが顕著な今日、大学院に対する社会的な期待や評価は以前と比べ変化してきている。わが国においては、歴史的にみて大学院が専ら大学教員の後継者育成機関として見なされてきた期間が長く、大学院の発展・拡大を大学の後継者需要との関連から考えようとする傾向が強かった。しかし、大学院が後継者育成という、いわば教育システムの内部需要に応えることを主たる役割としている状況のもとでは、需要は極めて限られたものにならざるを得ず、一般の社会人にもその意義は認識されにくいから、大学院教育の役割は極めて自己充足的なものにならざるを得ない。このことは大学院に投入される社会資本の量の拡大にとっては、政策的な抑止要因となる。また、企業等の社会の諸集団が潜在的により大きな高度な研究教育ニーズをもっていたとしても、大学院がそうしたニーズにあまり応えなければ、より高度な人材需要をもつそれらの社会集団は、その需要を充足させようとして、大学院以外にそのような人材育成と供給の仕組みを作らざるを得ないことになる。その結果、わが国の産業システム内部に、トータルとしてみれば大学院に比較して巨大な研究部門が形成され、高度な

専門の人材育成が企業内でオンザジョブ・トレーニングによって行われるシステム作りが促進され、あるいは外国の大学院に留学させる等の研究者育成の方策が講じられることにもなったのは、その意味で自然な企業行動の結果である。わが国の大学院と社会の今日的関係の特徴は、まさに研究開発に関わる高度人材の需要に関して、大学院が社会的ニーズに適切に応えることができず、大学院と社会のニーズとの間に大きなギャップが存在している点に見出される⁶⁾。

1989年に大学院設置基準が一部改正されたのは、そのような大学院と社会のニーズとの間のギャップを埋めることが目的であった。その基本的な考え方としては、これまでの大学院の目的や機能の複眼化を目指したものであったが、ここで注目されるのは、歴史的に「後継者育成機関」⁷⁾の色彩の強かった博士課程の目的を、単に「大学等の研究者」を育成するのみならず、「社会の多様化、複雑化等に対応」することのできる「社会の多様な方面で活躍し得る高度の能力と豊かな学識を有する人材を育成する」必要性を謳ったところにある²⁾。このことによって、博士課程も職業人育成の機関として社会的に明確に位置づけられたのである。まさに、「後継者育成機関としての大学院」から「社会的ニーズに適合した大学院」へと、わが国の「大学院観」が変化したことがうかがえる。

(2) 今後の医療系大学院に対する社会的ニーズについて

今日、国公私立の医療技術短期大学や専門学校が四年制大学へ改組し、さらに大学院を設置する動きが全国的に広がっている。それでは、医療系大学院に対してはどのような社会的ニーズが期待されていると言えるだろうか。

昨今の医療系大学院設置の動きの特徴として、医療人育成教育機関から出発した大学および大学院が、専門看護師の育成など、医療専門職業教育⁸⁾に重点をおいたカリキュラムを組む傾向にあることがあげられる。それは、医療人

育成課程として、数多くの医療人を地域社会に送り出すことで社会的ニーズに対応してきたという歴史を自負する立場からいえば、ごく自然のことであろう。また、医療は年々専門分化し高度化している現状を見れば、高度医療専門職の育成は、間違いなくわが国の社会的ニーズを反映していると言える。

しかしながら、高度医療専門職育成の教育カリキュラムは、看護師や診療放射線技師、臨床検査技師の資格を取得させるための大学課程のものと同じ発想のレベルでは限界があるであろう。高度医療専門職の育成は、専門性をより深めることができるという利点を持つが、そのことで逆に自分の専門以外は全くわからない専門職を作ってしまう危険性も伴うのである。医療専門職がたずさわる医療という社会的行為は、人間や人間が生活する環境が対象となっている限り、対象を、社会的・経済的・文化的にとらえる視点は不可欠である⁹⁾。そのことは、これまでの医学教育が過度に専門分化された医学を扱うあまり、医師の患者に対する視点が非常に限定的なものになり¹⁰⁾、「病気を診て患者を見ない」という医療不信が大きな社会問題になっていることから明らかである。

この反省から、高度医療専門職育成を目指すには、より高度な専門的知識や技術を高めていくと共に、自分たちの持つ知識や技術を社会にどのように還元していくことができるかという目を養うことを目的とした包括的なカリキュラムを組むことも不可欠であろう。そのためには、医療と社会科学の学際領域である、「健康と医療の社会学」¹¹⁾などの学問領域の履修を考慮することもひとつの方法であろう。また医学教育の現場においてチーム医療の重要性¹²⁾が強調されている今日、単に自分の専門領域だけでなく、他の医療専門領域との連携を行う教育も必要になってくるだろう。医学部のみならず、歯学部、薬学部、健康科学センター等の教育研究機関を擁する総合大学で自分の専門科目を勉強する利点は、高校生によっても期待されている。(ケース2)

(3) 大学説明会の意義について

最後に、本研究を通して明らかにされた大学説明会の意義と今後の取り組みのあり方について検討したい。説明会を主催する大学側にとって、大学説明会とは、自分たちの大学の特徴をアピールし、より質の高い受験生を募ることにある。一方、説明会を受ける側の高校生にとって、それは単に受験に関する情報を獲得する機会というだけではない。ことに、卒業することでなんらかの国家資格を得ることができる医療人育成教育型の大学を目指す者にとっては、将来の自分の進路を定める大きな岐路となるだけに、主催する大学側の想像以上に、的を絞ってきていると考えられる。このことは、説明会時の質疑応答の場においても、また自由回答にも現れている(ケース3)。

一方、大学卒業後の自分の進路について、ただ漠然としたイメージを持っている者も少なくない(ケース4~7)。このような者は、医療人としての自分の適性を模索しつつ、自分の進路を決めようとしていると思われるが、夢を実現するためには実際にどのような勉強をしたらよいのかについてはよくわからないでいる場合が多い。従って、多くの高校生たちは大学説明会に自分の将来の指針を与えてくれるような内容を期待して参加していることが伺える(ケース8~12)。

「豊かな人間性を備えた」¹³⁾医療人の育成を目的とする保健学科において、説明会とは、「看護師、診療放射線技師、臨床検査技師とは何か?」というオリエンテーションの場を高校生に対して提供する絶好の機会である(ケース8、11~13)。従って、大学説明会は、単に保健学科で行っている講義や実習内容についての情報を提供するだけではなく、将来医療専門職あるいは研究職、教育職としてやっていこうとする者に対して動機付けとなるような正しい知識や情報を提供することは必要不可欠であるといえるだろう。

《付記》

＜自由回答から＞

ケース1：大学院を早く設置して欲しいと思います。私は、看護の教育者になりたいので、この大学で奥深くまで学びたいと思っています。（2年生・女子・看護学専攻希望）

ケース2：私は実をいうと看護大を目指しています。でも、説明会にきて九大は看護だけでなく臨床とか放射線とか、医学部、薬学部などたくさんの医療系の学科が入っているのです。たくさんのことが学べるかもしれないなと思いました。今日指している大学と九大は受験科目が全く違うけどもう少し考え直してみようと思います。（3年生・女子・看護学専攻希望）

ケース3：もっとどのような研究をしていらっしゃる先生方がいるか、特に優れた看護の専門について、（九大の看護だからできること）を教えてくださいなと思いました。特に3年生対象でもあるので、もっと詳しい説明があってもいいのではないのでしょうか。説明内容も、まとまりがなく聞きづらい場面もありました。各専攻ごとの説明会の方が、時間的にも、内容的にもよかったですと思います。（2年生・女子・看護学専攻希望）

ケース4：看護学に進みたいとぼろぼろと考えていただけなので、いろんなことを聞けて勉強になりました。もっと今やるべき勉強をして、看護について夢を実現させたいです。（2年生・女子・看護学専攻希望）

ケース5：実際、ここで学んでいる人達の考え方が聞けてよかったです。やはり、今の自分の看護への考え方が知識が浅いなあと感じました。（2年生・女子・看護学専攻希望）

ケース6：今回の説明会に来て九大の保健学科に

ついてほしいなということができてよかったです。いままで考えていたイメージとちがう面や、医学の重要性がわかりました。（2年生・女子・検査技術科学専攻希望）

ケース7：各専門の職種の名称だけ（を知っていた）だけで、仕事の内容などまでは把握していなかったし、今までの資料などでもよくわからない部分が多かったので、今回の説明会で以前よりも知識が深まったと思います。また今回の説明会で医療系の職業の重要性を知ることができたので、興味・関心も高まりました。今日この説明会に出席できてよかったです。（2年生・女子・放射線技術科学専攻希望）

ケース8：臨床検査技術学を専攻した際、どのような科目を学べるのか詳しくわかりました、また、どのような人材が求められているのかもわかって良かったです。（3年生・女子・検査技術科学専攻希望）

ケース9：九州大学に保健学科ができて、その詳しい説明が聞けてよかったです。入試の制度とか科目とか知らないことも知れたし、ますます興味が増えてきました。小さい時から看護師になりたいと思っていて、近くに、看護学を学ぶ国立大学ができてよかったです。今日の説明会で、自分の進路がきちんと確定したような気がします。これから一生懸命勉強したり、発見したりして、楽しく受験して、大学に進めたらいいなあと感じました。（2年生・女子・看護学専攻希望）

ケース10：各専攻ごとに説明があったので、よかったです。私は検査技師になりたいのですが、あまりくわしいことを知らなかったの、具体的なことなどがわかりました。（2年生・女子・検査技術科学専攻希望）

ケース11：資料やビデオなど、とてもわかりやすく、ますます保健学科に入る意欲がわいてきました。また技術的なことだけでなく、“病める人”“豊かな人間性”などの言葉が印象的でした。(2年生・女子・看護学専攻希望)

ケース12：入試科目などの説明がわかりやすかったです。(ビデオに見た)看護婦さんの仕事は大変そうでしたが、やりがいのある仕事だと言うことが伝わってきました。(2年生・女子・看護学専攻希望)

ケース13：私は何も考えずに大学という所を見てみたいと思い、九大に来ました。だけど、説明を聞いて、医学に興味を持ったので勉強を頑張って充実した大学生を送りたいと強く思いました。(2年生・女子・看護学専攻希望)

《注釈》

- (1) 医療系大学では教職課程を履修するわけではないため、卒業生が就ける「教育職」というのは、看護系・医療系・福祉系大学や専門学校の教師に限られよう。
- (2) 平成11年に学校教育法が改正され、専門学校や短期大学などの卒業生であっても、大学院への入学が可能となった(学校教育法施行規則第70条第1項)。

《引用文献》

- 1) 隅谷三喜男. 大学はバベルの塔か. 東京：東京大学出版会, 1981.
- 2) 文部省高等教育局企画課内高等教育研究会編. 大学審議会答申・報告総覧—高等教育の多様な発展を目指して—. 東京：ぎょうせい, 1998；8-20.
- 3) 平成11年度大卒男子・女子内定(就職)率の推移. 厚生労働省ホームページ (<http://www2.mhlw.go.jp/kisha/syokuan/2000512-02-sy/20000512-02-sy-zu.html>)
- 4) 学生確保に苦肉の策? 大学講義で「就職入門」.

朝日新聞西部版, 2001年2月20日夕刊.

- 5) Susan Boughn, Alison Lentini. Why do Women Choose Nursing?. Journal of Nursing Education, 1999; 38(4): 156-161.
- 6) 牧野暢男. 大学院と社会との関係—社会的ニーズへの大学院の対応. 石井紫郎, 編. 転換期の大学院教育. 東京：大学基準協会, 1996；201-253.
- 7) 牧野暢男. 社会人の大学院. 市川昭午・喜多村和之, 編. 現代の大学院教育. 東京：玉川大学出版会, 1995；257-274.
- 8) 荒井克弘. 専門職業教育としての大学院. 市川昭午・喜多村和之, 編. 現代の大学院教育. 東京：玉川大学出版会, 1995；208-223.
- 9) 園田恭一. 健康の理論と保健社会学. 東京：東京大学出版会, 1993；119-137.
- 10) 牛場大蔵. 医育者のトレーニング. 阿部正和, 編. 医学教育. 東京：中央法規出版, 1985；76-87.
- 11) 山崎喜比古, 編. 健康と医療の社会学. 東京：東京大学出版会, 2001.
- 12) 岡安大仁. 医師としての人格形成はどこで行われるか. 阿部正和, 編. 医学教育. 東京：中央法規出版, 1985；95-109.
- 13) 九州大学医学部保健学科パンフレット, 2002.